

『題烏江亭』 杜牧

烏江を訪れ・杜牧の思い

題烏江亭 杜牧

うこうてい だいま
烏江亭に題す 杜牧 とぼく

勝敗兵家事不期

しょうはい へいか ことき
勝敗は兵家も 事期せず

包羞忍恥是男兒

はじ つつ はじ しの こ だんじ
羞を包み 恥を忍ぶは 是れ男兒

江東子弟多才俊

こうとう してい さいしゅん おお
江東の子弟才俊多し

卷土重來未可知

けん どちやうらい いま し
卷土重來未だ知るべからず

【語句の意味】

烏 江 地名 秦代に烏江亭が置かれた 今の安徽省の

東北 長江の北岸にあり 楚の項羽が漢の劉邦

の軍に攻められて落ち延び最期をとげた地

兵 家 軍人 戦略家

不 期 予測できない

包羞忍恥 恥辱に耐えること

江 東 長江下流の南岸の地 今の江蘇省南部及び浙江

省北部にわたる一帯

子弟 若者

才俊 すぐれた人物

卷土重来 地面を巻き上げるような勢いで再び来ること

一度負けた者が再び勢力を盛り返して攻めて来ることの例え

未可知 どうなっていたか その結果はわからない

【詩の意味】

戦の勝敗は戦略家でさえも予測できるものではない。たとえ敗れても恥辱に耐えて、再起をはかってこそ真の男児である。

項羽の本拠地である江東の若者たちは、優れた人物が多い。この地で今一度力を蓄え、地を巻き上げるような勢いで、再び攻め挙げていたら、その結果はどうなっていたか分からないのに。

【鑑賞】

この詩は項羽の死後、千年の歳月を経て晩唐の詩人杜牧が烏江を訪れ、英雄項羽の最期を偲び、その死を惜しんで此の詩『烏江亭に題す』を詩作した。

紀元前202年、垓下において項羽が劉邦（沛公）と戦って幾重にも敵に囲まれた。しかし、その重囲を脱し、烏江の渡し場まで落ち延びて来た時、一艘の小舟を準備していた亭長が、「どうか王さま、早くお渡りください。今、船を持っている

のは私だけでございます。漢軍には渡るすべはございません。」

「あなたの故国である江東の地は小さいながら人口も数十万人はいるし、王となるには十分です。」

と渡ることを勧めたが、項羽は、

「天が私を滅ぼすのであるから渡っても無駄である。郷里の多くの若者を犠牲にしまった、今親をはじめとする親族たちに会わず顔もない。」

と亭長に断り、敵中に斬り込んで最後は力尽きてその場で自害した。

この歴史上の事実を、もし英雄項羽が恥辱に耐えて、今一度「卷土重来」して勢力を盛り返したなら、歴史は変わっていたであろうと、杜牧は項羽の力量を惜しんでいる。実際一時項羽は天下を把握した英雄であるが、虞美人との離別を含む末路があまりにも哀れだったことから項羽に肩を持つ人々が多かった。杜牧もまたその一人であった。

【作者】杜牧 803～853

晩唐の詩人・政治家。字は牧之、号は樊川。京兆（陝西省長安県）の名門の出身。23歳の時「阿房宮の賦」を作りその天才ぶりが世に知れ渡った。憲宗朝の宰相を務め、歴史学者としても有名な杜佑の孫にあたる。26歳で進士となり、江蘇省の揚州に赴任した時代には名作を多く遺している。歌舞を好み青楼に浮名を流したこともあるが、小さいことにこだわ

らず、国家の前途を論じ詩風も豪快で昔を偲び、史実を詠じ時事を諷詠する傑作が多い。絶句が得意で、「江南春望」「山行」「清明」などは、よく吟じられている。「樊川文集」二十卷「樊川詩集」七巻がある。

【参考】

二人の英雄Ⅱ項羽と劉邦Ⅱ

今から2200年前（紀元前230年頃）春秋・戦国時代における混乱期に斉を滅ぼし、中国初の全国統一を成し遂げた秦の始皇帝。

始皇帝は、万里の長城をはじめ、さまざまな土木工事を手掛け、中国大陸すべての人民の上に君臨する皇帝として絶対政権を誇っていた。各地を巡幸する始皇帝を群衆に混じって見ていた二人の人物がいた。

一人は後の漢の初代皇帝となった劉邦である。彼は身分の低い農民の出であった。劉邦は、始皇帝の土木事業の労役に従事していた。26歳のとき、ある日、たまたま地上最大の権力者が道路上をしずしずと移動してゆくのを見て、その壮観に打たれたが、しかし感動したのではなかった。大きく息を吐いてから「大丈夫、当二此ノ如クナルベキナリ」と、呟いた。

一方、楚の国の將軍を先祖にもつ項羽（項籍）は11歳のとき、会稽で始皇帝の巡幸に出遭った。彼は群衆とともに

見物した。華麗な輜輳車おしりようしゃが近づくや、

「彼取ツテ代ルベキナリ」

と大声で叫び、同行していた叔父の項梁を狼狽させた。

項羽は若い頃、文字や剣術の勉強をしたが中途でやめてしまった。叔父の項梁がそれを怒ったところ、項羽は、「文字は名前が書ければ良い、剣術は一人の敵を相手にするだけでつまらない。」万人の敵を相手にする術を学びたいと言った。そこで項梁は兵法を教えた。項羽は、長身で力もあり、才気は人に過ぐるものがあった。激しい気性の人であったが一面、虞美人との別離に見るような人間的な魅力があった。

漢楚の戦いⅡ鴻門の会

將軍の血筋を引く項羽は武力に物をいわせ、華々しくその勢力を拡大した。一方の劉邦は人を信じ、よく人を率いたので次第に人材が周囲に集まり、劣勢ながらも粘り強く項羽に對抗した。

両軍の争いは熾烈を極めたが、先に秦の都を占領したのは劉邦だった。遅れた項羽は激怒し、「おのれ劉邦め！」怒り狂った項羽軍の前から劉邦軍は逃げた。もはや助かる途は項羽に許しを乞うのみと考えた劉邦は、咸陽を明け渡すことを約束すると共に死を覚悟で鴻門の会見に臨んだ。

劉邦は、すべては大王（項羽）のために、さらには大王に

関中を引き渡す為にやったことで、大王に思わぬ疑心を持たせたことは劉邦の不徳であると申しひらきました。

劉邦を殺すことを進めていた項羽の臣の范増は、項羽が劉邦を生かしたことに腹を立て、口惜しさの余り張良（劉邦の臣）の献じた玉斗を粉碎した。范増のような謀將にまで見限られた項羽は次第にその勢いを失い、五年間の争いも、やがて終結を迎えるように垓下に移していた。

『項羽の作と言われている詩』

垓下歌 項羽

垓下の歌 項羽（項籍）

力拔山兮氣蓋世
時不利兮騅不逝
騅不逝兮可奈何
虞兮虞兮奈若何

力山を抜き氣世を蓋う
時に利あらず騅逝かず
騅の逝かざる奈何すべき
虞や虞や若を奈何せん

『項羽の歌に返した虞美人』

別れの歌

返歌 虞美人

返歌 虞美人

漢兵已略地
四方楚歌聲
大王意氣盡
賤妾何聊生

漢兵已に地を略し
四方楚歌の聲
大王意氣尽く
賤妾何ぞ生に聊んぜん

楚軍が漢軍方に寝返ったと思い（四面楚歌）

垓下で項羽が劉邦の漢軍に囲まれた夜、漢軍の兵たちが四方で楚の国の歌を唄う声を聞いて、項羽は耳を疑った。自分の根拠地である楚は占領されたと思った。

もはやこれまでと、いつもそばから離さなかった虞姫と愛馬の騅を歌って悲歌慷慨した。虞美人を相手に最後の酒宴を開き、虞美人を思いやり、涙する。項羽が歌い、虞美人が詠い返し、また項羽が舞うと虞美人が舞い返し終わる。

項羽は（虞や虞や）と虞美人を余人に手を触れさせることを拒絶し虞姫の死を見届け漢軍を突き抜け烏江の地で、刃を頸にあてて、みずから刎ねた。紀元前202年、31歳であった。

〈補足〉

沛公漢の高祖（劉邦）がまだ漢王の位に就かない時の称
項籍字は、羽（項羽）

「卷土重来」は「土を巻き重ねて来る」とも読む「砂塵をまきおこす勢いで再び来る」という意味だが、転じて「失敗した者がまた勢いを盛り返す」ことをいう。「卷」は「捲」とも書く。

※この詩「烏江亭に題す」は、文宗・開成4年（839）春、宣歙觀察使（治所宣州・安徽省宣城）にて幕職官の任にあった杜牧が、佐補闕・史観修撰の命を受けて朝廷に赴任する際に、その行路の烏江亭を通った時の作である。